



自己体験発掘調査

文学部教授 綾村 宏

歴史公園平城宮跡

かつて文化庁のもと奈良文化財研究所(奈文研)が発掘調査から整備、建物復元までを担当していた平城宮跡は、二〇〇八年国営公園として整備することが決まり、国土交通省の管轄のもと国営歴史公園となった。その平城宮跡歴史公園開園記念の式典がこの三月二四日に執り行われた。平城宮跡にはいままでと違った文化財として活用するという新しい展開が待っているとさえいえる。私は本学で勤務することになった一二年前まで、その奈文研に三〇年余り勤務した。その前半は平城宮跡の発掘調査と出土木簡の調査研究であり、後半は奈良地域を中心に寺社で所蔵されている文書記録、経巻聖教の調査研究であった。

発掘調査回顧

新年度のはじめの「ふんだりけ」で、自分の過去を振り返るのもどうかと思ったが、あと一年で定年退職を迎える者の自己体験から思うことを述べさせてもらうこととする。まず奈文研での勤務のスタイルからである。発掘調査の方は、一年のうち三ヶ月が平城宮跡での発掘現場に、残り期間は木簡の釈読と内容研究に従事した。発掘現場は六、七人の班で担当し、同じ班が同じ季節にあたるように、一年毎に担当の季節が繰り返されるように班編成されていた。寺社の書跡資料調査は、基本的に同じ時期に

研修現場

最初の現場は、新入社員研修の現場である。調査区は平城宮内裏北東の一郭であった。東と南が宮跡構内を走る道路で区画された場所である。その現場では杉材一木造りで径一・六五メートルの井筒が出現した。その井筒は現在も平城宮跡遺構展示館で保存処理されて

宮跡庭園

その二年後、いまは宮跡庭園として特別史跡になっている平城左京三条二坊の郵便局建設予定地の調査でも印象深い光景を目の当たりにした。夏のトレンチ調査で池底の敷石の存在が確認され、秋の班で本格的な調査になった。池の輪郭が判明した後、埋土の排土にな

るが、その最下層の粘土層を掘りあげるとその下から三〇センチメートルほどの大きさの石が整然と敷き詰められた状態で検出された。奈良時代に造られた池が完全な形で発見されたのである。

大嘗宮跡

また大嘗宮の遺構の発見も印象に残る。平城宮第二次朝堂院の朝庭部分は、北中央に大極殿、周辺に朝堂の建物が建ち並ぶ広場である。儀式の時、官人たちが整列する場所であり、当然建物遺構はないはずである。しかし平城宮跡を整備していくためには、建物遺構がないと想定される場所も、ないことの確認が必要である。そこで発掘調査が行われたのであるが、その場所では建物としては大嘗宮の遺構が三時期の立て替えを示して検出されたのである。それ

記憶と記録

いま自身自身の発掘調査体験でとくに印象深かった事例をあげてみた。そこには想定外の発見がやはり印象度が高く、記憶に残っている。しかし自分の記憶より、その発掘調査の客観的な記録が当然のことながら価値がある。遺った遺構もあれば、工事で消滅した遺構もある。記録によつてのみ未来においてその発掘調査成果が判断されることになる。記録にも限界があるが、少なくとも個人の記憶にのこる実体験の記録化が求められているのであろう。

長屋王家木簡

このように想定していない場所でも思いがけない発見があると、発掘調査の成果として印象に残ることとなる。その最たるものが長屋王家木簡の発見であろう。平城京左京三条二坊に四町占地の大規模な邸宅跡が見つかったのは、その場所にデパートが建設されるのにもなう事前調査であった。発掘調査もほぼ建物

調査が終了した場所では建設工事の基礎工事が始まりつつあった段階のことである。立ち退きの関係で発掘調査されずに残っていた部分を、工事により遺構が残らないことが確実なため、発掘することになったのである。そこで短期間で掘りあげるため重機などを利用しての調査に着手した。現場では調査員が重機での排土状況をじっと監視していたが、排土のなかに木片が含まれていることが判明し、重機作業をやめて手掘りの調査に切り替えての発掘が行われた。その結果長屋王家木簡が捨てられていた溝状の遺構の全容が確認でき、木片を多く含んだその埋土をコンテナに収納して事務所に持ち帰ることになった。その木簡の洗い出しには三年ほどの期間を要した。

お知らせ

* 新入生本願寺参拝 *

新入生全員が西本願寺に集い、入学の喜びと大学生活への新たな決意を誓います。

日時 平成30年4月5日(木)
10:00~11:40
《9:40集合厳守》

場所 西本願寺 御影堂

* 聖典、お念珠を持ってきてください。
* 当日は堀川七条にプリンセスラインバスが臨時停車します。詳しくは新入生オリエンテーション日程表(裏面)を確認してください。



* 花まつり(灌仏会) *

4月9日は仏教の開祖、釈尊(ゴータマ・シッダルタ)のお誕生日です。その日を「花まつり」(灌仏会)としてお祝いします。みなさんも甘茶をかけて一緒にお祝いしませんか? お祝いの甘茶あめを差し上げます。

日時 平成30年4月9日(月)
10:00~16:30
場所 A・B・Y校舎正面玄関前

12:25からB校舎玄関前にて雅楽部によるお祝いの演奏を行います。



シリーズ 智慧の蔵 ⑮

『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』

小谷みどり 著 岩波新書 二〇一七年



現代の日本社会は、核家族化や少子化、高齢化が進み、人口減少社会に突入した。それにより、これまでの経済や地域社会は大きな変革が迫られている。葬儀や墓も例外ではない。本書では、諸外国の葬送事例や各種アンケート結果などから、日本特有の問題も明らかにしている。以前、評者は首都圏の葬儀業者を対象として、祭壇がなく宗教儀礼も行わない「直葬」の増加理由について調査したことがある。すると、遺族が「迷惑をかけたくない」との理由で「直葬」を選んでいくケースの多いことが分かった。本書でも、簡略化した葬儀を選択するのは、同様の理由を述べる遺族が多いことに触れている。ただ、自立できなくなると、誰もが他人の手を借りなければ生きてはいけない。そこで、本書では「まわりにかける手間を迷惑とさせないような方法を考えた方がよい」と提案する。「手間」と「迷惑」のさじ加減は、人々との関係のなかで変化するのである。「大切な人」であれば必要な「手間」と捉えるし、「関係のない人」であれば「迷惑」な行為と感ずるだろう。つまり、現代の葬式と墓に関する問題は、人々とのつながりの喪失が表出していることを示している。さらに、本書は「お葬式やお墓は不要と考えるのではなく、託せる人を探し、信頼関係を築いておくことこそが、元氣なうちに私たちにできる自助努力である」というメッセージを込めて教える。

法のことば

本師龍樹菩薩は

大乘無上の法をとき

歓喜地を証してぞ

ひとへに念仏すすめける

(高僧和讃) 龍樹菩薩第三首

親鸞さまは、念仏の教えを伝えてくださったインド・中国・日本七人の高僧を挙げられ、その高僧方の功績や説かれた教えを歌にされて、『高僧和讃』に著されました。今年度の「法の言葉」は、この七人の高僧についての和讃を紹介いたします。最初の今回は、インドの龍樹菩薩(ナーガールジュナ)です。二世紀半ばに南インドに生まれた龍樹菩薩は、それまでの仏教とは違って自利利他を強調する大乘仏教の教えを説かれました。そして、五十二段階ある菩薩の位の中、四十一番目の「歓喜地」の位に至られ、たぐさんの大乘仏教の論書を著されましたが、『十住毘婆沙論』の「易行品」において、阿弥陀さまの念仏の教えを示して、人々にすすめられたのです。その功績を讃えて、親鸞さまは七高僧の第一番目に挙げられるのです。

(森田 眞円)

(那須 公昭)